

- 10 | 大原美術館に学ぶ芸術の力と、美術館大学構想について／理事長 徳山詳直
- 12 | 美術館大学構想二〇〇五年度活動報告
- 14 | 美術館大学構想シンポジウム
ことばの柱をたてる
美術館大学ことはじめ 芳賀徹×酒井忠康×藤森照信
- 44 | 宮本隆司写真展 箱の時間
トークセッション／宮本隆司×元倉真琴×田口洋美
- 56 | 珍しいキノコ舞踏団
TUADアーティストインレジデンス2005
公開練習+ダンスパフォーマンス／学生ボランティアレポート
- 64 | 富田俊明展『あなたという喜び』
対談「民族学の旅、芸術の旅」赤坂憲雄×富田俊明
対談・公演 森繁哉×富田俊明／学生レポート
ワークショップ「二重体」、「泉の話」を読む／学生レポート
鶴岡アートフォーラム開館記念展
- 80 | BANDED BLUE 東北芸術工科大学の28作家
卒業生支援センター企画事業
- 84 | Im here. 「アートを生きる、アートで生きる」五つの空間展
収蔵作品一覧
- 88 | 収蔵作品一覧
- 90 | TUAD EVENT CALENDER 2005 (展示会・公開講座・イベント等)

大原美術館に学ぶ芸術の力と、 美術館 大学構想について

東北芸術工科大学理事長 徳山詳直

今年（平成十四年）の五月の連休に、私の故郷、日本海の隠岐の島へお墓参りに行きました。そこからいろいろ巡り巡って、岡山に入つて、いつしか、あの倉敷の大原美術館に行っていました。かつて何度か行ったことがありますが、今回何となくいつの間にか、倉敷の美術館へ紛れ込んだと言つた方がいいかもしれません。

大原美術館は倉敷紡績という明治の初期に文明開化をうたつてできた紡績会社が前身で、日本各地から集められた女工さんたちのいわば血と汗で稼いだお金でつくつた美術館です。私はこれまで、これはある意味で女工哀史のお手本だと思つて、何となく手放しでは評価できませんでした。ところが今回、美術館に入つてみて、まず何に驚いたかという点、人の多さです。ともかく大変な人でした。人、人、人、全て人で埋まっています。問うてみると年間五〇〇万人もの人たちが集まるそうです。

そんなことを見ているうちに、一体、大原美術館とは何だろうと考へ、いろいろな資料を手に入れて、随分詳しく調べてみました。ここで驚くべき発見をしました。この美術館は、女工さんたちの血と汗でつくり上げた美術館と思つていましたが、実はそれだけでは正しくありませんでした。明治四〇年に大原孫三郎という人が、若干二七才で大原家の後を継ぎ、倉敷紡績の二代目の社長に就任しました。その次の年、彼が二八才。明治四一年に日本の明治政府が軍隊を強化して、軍国主義が華やかに出発し始めた頃、岡山に師団司令部をつくることになり、その一部連隊を倉敷に置くことを、国が決定しました。明治の終わりですから、国策に反対するということは厳しい状況で

あつたはずですよ。ところがこの若干二八才の孫三郎は、断固としてこれに反対したんです。その反対の理由はこうです。もし倉敷に若い兵隊たちが何千人も入つて来たら、明治の文明開化の旗手として働く娘たちが傷つき、風紀が乱れるかもしれない。何が何でもそれは阻止したいということを彼は宣言するんです。彼はその戦いに勝つて、日本の軍部は倉敷に連隊を置かませんでした。

孫三郎は二八才のときから、ずっと児島虎次郎を中心とする若い作家たちと密接に連絡を取りあつていました。そして、日本はやがて文化と芸術で立つんだとこういうことを言っているんです。軍国主義一辺倒の時代に、すでに彼は日本の将来は文化と芸術だと言いつつ切っているんです。そして昭和五年に大原美術館ができました。その次の年に満州事変が起き、日本は勝ちましたが、やがて世界の列強が日本に集まり、日本の軍国主義をこれ以上強くさせないよう方策が練られました。そのときに日本を視察に来た欧米人の何人かが大原美術館へ立ち寄りました。ここでエル・グレコの絵を中心にしたあの凄惨な大原美術館の佇まいを見て、みんなあつと驚いたそうです。こんな素晴らしい美術館が日本の片隅にあつたのかと。これは大変だと言つて感動して帰つたそうです。

やがて戦争が始まつて、日本の国は尽く絨毯爆撃を受けました。隣りの岡山も全部廃塵と化しました。ところが、倉敷の町だけが爆撃を免れたんです。京都と倉敷だけが日本で二つだけ、爆撃を受けなかったのです。これはなぜかという点、京都は文化的歴史的に非常に素晴らしいところ、人類の遺産だから、爆撃をしないようにしたんだそう

ですが、同じように倉敷は大原美術館があったため、あれを爆撃してはならないという指示が出たんだそうです。そして、日本中が爆撃されて廃塵と化す中で、大原美術館を持つ倉敷の町と京都は生き残りました。このことには非常に深い意味を感じます。芸術・文化・美術という美しいものに対する人間の憧れというものは凄い力です。芸術の果たす役割はこんなに大きいものか。つまり戦争を抑止する力があるのではないかと。芸術する心、文化を大切に作る心、そういう人間の力というのは、戦争をも阻止するのではないか。そう思うと芸術の果たす役割、あるいは文化の果たす役割、教育の果たす役割というのはいかにも重大だと考えて、大原美術館に対してもすつかり考えが変わりました。

何を言いたいかという点、芸術や文化というものこそ、実は本当に国を救い、人間を救い、そして人類の未来を救うんだということだと思います。そんな意味で、東北芸術工科大学はまさにその道を歩んでいきます。やっぱり考えるのは、東北芸術工科大学がこれからどう生きていけばいいのか。どう戦うことが本当に大学としての使命を果たすことなのか。それと京都造形芸術大学とスクラムを組みながら、どんな風に日本のこれからのために役に立つ芸術の大学になるのか。そんなことを考えていたら、「美術館大学構想」が忽然として浮かんで来たのです。

では一体どんな美術館を作ればいいのか。この大学のキャンパスを全て美術館にしよう。つまり芸術大学の中に美術館を持つのではなくて、美術館の中に芸術大学が存在する、芸術とデザインの大学が美術館の中にあるという設定ではどうだろうか。そのような美術館大学という構想はどうだろうかと思いはじめました。同じように京都もそうあるべきではないかと考え始めました。それぞれ、個性と生き方は違ったとしても、目指すところはただ一つ、この国をどうする

か。この日本の文化をどう生き生きと蘇らせて、新しい時代に残っていけるかというのが大学の使命なのです。

大原孫三郎は、昭和十八年、戦争の最中に死ぬわけですが、死ぬときに彼はこんなことを言い残しています。「おれはいろいろなことをやってきたけれども、何が辛かったかという点、美術館をつくったことだ。あれさえ作らなかつたら、おれはもつと楽だった」。しかし、倉敷紡績はなくなりましたが、大原美術館は倉敷の町を救い、今日、日本の中で燦然と輝いています。今、倉敷の町は人口五〇万人の大都市です。そして、年間五〇〇万人の人が集まります。あの美術館がなかつたら、倉敷の町は存在していないかもしれませぬ。京都もあの歴史の遺産が残っていなかつたら、つぶれてしまっていたかもしれませぬ。芸術とか文化とかいうものがいかに大切かということ、繰り返し繰り返し繰り返し上げたいわけですが、とにかくこの大学の卒業生、在学生、先生方、これは何も絵や彫刻・陶芸に限りませぬ。デザインの作品はもちろんのこと、文学の作品もあります。詩もあります。さまざまなものすべてが芸術と文化です。だからそういうものをひっきりめめた美術館でありたい、そういう大学でありたいと考えています。大学の敷地、悠創の丘が全部そういうもので埋め尽くされていけば、やがてそれが山形全体に広がっていき、この都市が大きく生まれ変わっていくと考えたら、どんなに素晴らしいことだろうと思つていきます。

ともかく、新たな芸術・美術あるいは文化、そういうものを大切に作る国でなければ、これからは恐らく生きていけないのではないかと。その哲学を貫き通す大学でありたいと考えています。

(平成十四年七月二四日／教職員総会での講話より)

美術館 大学構想 二〇〇五年度活動報告

大学と美術館の機能を融合させた「美術館大学」は、山形における芸術文化拠点の創造を試みる

東北芸術工科大学は西蔵王の丘陵に建つ。キャンパスには、春の山々の沸き立つような緑、敷地内を流れる小川に螢が群れる夏、背後にそびえる蔵王の燃えるような紅葉…と、四季の移ろいに応じて、様々な色彩、香り、光に満ちた自然のヴェールが敷き詰められる。学生たちの制作・研究の日々は、自然と街の境界にある里山の日常として過ぎ、学期末、雪に閉ざされた冬の時間の中で、各々の芸術的な内省へと深まっていく。

二〇〇二年度からスタートした美術館大学構想は、このような自然豊かな敷地全体にアート作品を点在させる、オープンエアームジウム構想として進められた。周囲の街区といっさいの扉も仕切りもないキャンパスの特性を生かして、地域に開かれた美術館施設として、学内の制作・研究成果を社会に還元していくことを目指した。以後四年間で、ギャラリー空間の増設、情報共有を目的とした映像システム（インフォメーション・パッサージュ）設置、本館や図書館の壁面を活用したコレクションの常設展示等、作品展示に関するインフラは年々拡大・充実してきた。

そして二〇〇五年度からは、独立部署として学内に美術館大学構想室を設置。専任学芸員を置くとともに、構想委員長に酒井忠康氏（本学教授／世田谷美術館長）を迎えた。長く神奈川県立近代美術館長として日本の美術館行政を担ってこられた酒井氏の手腕によって、いよいよ美術館大学構想は、従来の収集活動や施設改修に加え、東北の風土を意識した、オリジナルな公開事業に着手していったのである。

徳山詳直理事長による「この疲弊した時代に、芸術になにが可能か？」との問いが、姉妹校の京都造形芸術大学も含め、全学的に投げかけられ

ている中、美術館大学構想は、建学理念『東北ルネサンス』の具現化を目指して本格的に活動していくことになった。

以下、構想の基本コンテンツとなる三つの柱「開示・収集・アーカイヴ」に沿って、二〇〇五年度の事業内容を報告する。

開示

美術館大学構想では、収集した芸術資料を公開するとともに、シンボジウムやワークショップなどを通して、本学に集約された知的・芸術的資源を学内外に開示していく。

公開事業の企画・立案にあたって、酒井委員長が提起した今後三年間のキーワードは「環境」・「神話」・「デザイン」・「集約」の段階的な移行であった。今年度のテーマ「環境」では、本学が位置する山形にまつわる歴史・文化・風土への見通しを明らかにすることで、美術館大学構想全体の出発点を定めていった。

酒井氏がモデレーターを務めたシンポジウム「ことばの柱をたてる―美術館大学とはじめ―」は、学生だけではなく周辺地域の人々も交え、寄り合い所のような親密な雰囲気の中で開催された。ここでは東北の文化・美術館・大学が、二一世紀の社会に向けて、どのような存在価値を示すことができるのか、参加者全員が車座になって話し合った。三時間にわたった酒井委員長と、比較文学者で京都造形芸術大学長の芳賀徹氏、建築史家の藤森照信氏による知的でユーモアあふれる丁寧な語りには、まさに言葉による美術館大学の棟上げ式となり、そのおらかな語らひは、本レポートの巻頭に完全採録した。

また、キャンパスを舞台にした美術館の公開事業として、大規模な企

画展とアーティスト・イン・レジデンス(滞在制作助成事業)運営にはじめて着手した。これらの取り組みでは、現行の大学環境を『美術館大学』へ変質させていくには、どのような教職員スタッフの意識転換や、施設改修が必要なのか、構想に携わる全ての人が経験を通して思考することが求められた。

本館七階ギャラリーで開催された企画展示『宮本隆司写真展一箱の時間』は、山形市内各所から約二千個のダンボールを回収し、積み上げた巨大な隔壁でギャラリー空間を仕切るというインスタレーションとなった。既存施設の魅力を最大限に引き出した、展示の成功例が示せたと考えている。

ダンス・カンパニー『珍しいキノコ舞踊団』と、現代美術家の富田俊明氏を招聘した二つのレジデンスでは、多くの学生が企画の準備・運営に関わり、山形でのアーティストの制作活動をサポートした。レジデンスの項に掲載した学生レポートでは、学生たちの視点から美術館大学構想が綴られている。

その他に、学内外の機関・団体からの要請を受けて、企画展のコーディネートも手がけた。卒業生支援を目的に開催された『In Here. アートに生きる、アートで生きる五つの空間展(せんだいメディアアテック)』や、教員展『BANDIED BLUE 展(鶴岡アートフォーラム)』などがこれにあたる。教員・卒業生の制作活動を紹介するこうした展覧会も、美術館大学構想の重要なレパートリーとして今後も継続的に開催していく。

また、アートに限らない、様々な領域の専門家を交えたトークセッションやワークショップに、各企画の関連イベントとして積極的に組み込み、学内の多様な制作・研究活動が人的に交流する場を設定した。これには美術館は(人々が出会い交流する)港」とする酒井委員長的美術館観が色濃く反映されている。特に富田俊明氏のレジデンスで試みた、民俗学とアートの交感の可能性は、本誌に掲載した富田氏と赤坂憲雄氏(東北文化研究センター所長)の対話に詳しく、歴史遺産学科(民俗学・考古学)を擁する本学特有のアイデンティティを対外的に示す好企画となった。

収集

美術館大学構想では、美術・デザインのみならず、文学や詩など、表現領域全般にわたる芸術資料や情報を歴史的遺産と位置づけ、学生の制作意欲や、地域の人々の知的好奇心を喚起させるような作品を収集していく。現在は教員による作品寄贈や、卒業制作買い上げ制度によるコレクションを進めており、来年度からは新たな研究施設として学内に誕生した文化財保存修復センターの協力を得て、収蔵庫整備や破損箇所の修復、薫蒸などコレクションの定期的なメンテナンスも可能となった。

アーカイヴ

今年度から本構想は「モノ」美術品の収集だけでなく、様々な「コト」企画展・シンポジウム・レジデンス等を展開した。美術館大学構想室では、これらの「コト」から得た経験を記録し、実践例として教育現場に応用していくためのアーカイブシステムの構築を準備している。現時点では、美術館大学構想のホームページ(<http://www.tuad.ac.jp/museum>)内のコンテンツとして、各企画の基本情報をまとめたページを、コレクション作品画像とともに、ウェブ上のアーカイヴとして随時公開している。また、小沢明学長の呼びかけにより構想室が編集・出版したエッセイ集『私の語るアートとデザイン』では、本学で教鞭を執る四人によるアート・デザイン私観を紹介した。本誌アニュアル・レポートも含め、こうした出版物の継続的な発行も、美術館大学設立に向けた重要な蓄積となるだろう。

さて、酒井忠康委員長が設定した二〇〇六年度のテーマは「神話」である。現在準備中の様々な企画が、後も忘れがたい光景として語り継がれるよう、構想室スタッフ一同、この山形の丘にフォークロアの種を蒔くつもりで力を注いでいきたい。

(美術館大学構想室学芸員 宮本武典)